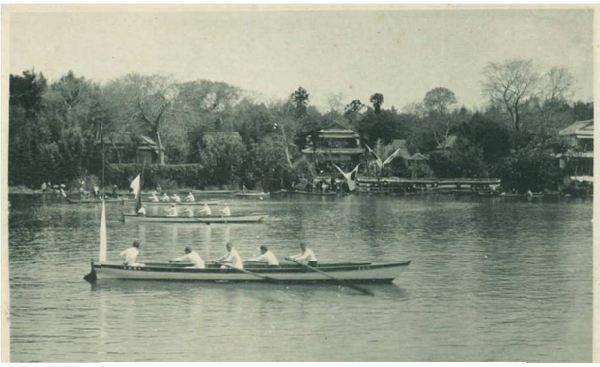
熊本県ボート協会からの提案書　　2021.03

はじめに



阿蘇山を有す「火の国」として有名な熊本県は、全国でも有数な「水の国」でもあります。その豊かな水の恵みの恩恵を受け、本県でのボート競技の歴史は古く、明治末期より学校体育を中心に活動がスタートしました。明治の文豪夏目漱石が第五高等学校教員時代、漕艇部の部長を務めたとする史実も残っており、当時、定期的に行なわれる対校戦は地域を巻き込んで大いに盛り上がり、ボートレースの日には、江津湖畔が多くの人々で埋め尽くされたといわれています。

100 年の時を超え、近年では当時のような風物詩的な要素はなくなりましたが、昔と変わらず、学校体育を中心に競技が行なわれています。特に高校生の競技力は大変高いものがあり、全国大会において幾度の全国制覇、上位入賞を果たす素晴らしい成果を上げ、世界大会へ出場する者もおり、本県のボートは九州屈指の競技力を持つまでに至りました。

本県には、江津湖ボートコース（常設 1000ｍ４コース）、菊池市には斑蛇口湖ボートコース（常設 2000ｍ６コース）を備えています。他県にこのような常設コースを複数保有する県はなく、両コースともに水面も安定しており、安全かつ円滑な練習、合宿を行う事ができます。これまでも国体やインターハイをはじめとする多くの全国大会、日本代表選考会や代表合宿等を開催されてきました。

国際大会も可能な班蛇口湖コース

市民のオアシス江津湖

ボート競技とは

近代ボート競技の始まりは、17 世紀初頭といわれています。第 1 回オリンピックから種目として採用されており、歴史の長いスポーツです。ボート競技は究極の団体競技といわれ、クルー全員の一体感が大切なスポーツです。調和した漕ぎ手の動きと水面を進む艇、そしてコックスのレースの駆け引き等、ボート競技の魅力は数多くあります。日本においては、ボート競技者のメインは大学や実業団ですが、ボート発祥地である欧米諸国では、一般市民の間でも盛んに競技が行なわれています。

現状と今後の取り組みについて ～地域スポーツとしてのブランド化をめざす～

ボート競技は「水の国熊本」の象徴にふさわしい競技であり、今後は恵まれた環境を地元の方々にも認知していただき、ウォータースポーツを通して自然環境保護についても認識を高めていただくことはとても有意義なことだと考えます。近年、江津湖の環境は外来種植物等の異常繁殖をはじめ悪化の一途をたどっています。未来にこの豊かな環境を残していくために、これからも競技運営だけに限らず、清掃活動をはじめとした様々な取り組みをしていきたいと考えています。

また同時に２０２０年東京オリンピック・パラリンピックをはじめ多くの国際的なスポーツイベントが開催されるのを機に、スポーツ全体で社会的な価値を高める取り組みが今後必要です。これからの時代を担うジュニア世代においてはさまざまな競技の機会を創出し、自分にあった競技を選択する「マルチスポーツ活動」を行うことは本県の競技力向上にもつながると考えます。ボート競技においてもタレント発掘事業を積極的に受け入れ、競技転向型のタレント発掘・育成パスウェイなど、競技へのエントリーの多様化にも取り組んでいく必要があります。しかし現状では、ほとんど競技に触れ合う機会が少なく、ほぼ全員が高校生から競技をスタートさせる状況です。また活動は学校単位の部活動が中心であり、環境によっては素質を伸ばせないまま競技活動を終えてしまう状況もあります。ボートの場合、水域が限られるために競技普及が難しく、学校体育となると校外での活動、艇をはじめ高価な道具類を整備することはとてもハードルが高く、今後、少子化の中で新規の部活動の創部はかなり厳しい現状があります。また、すでに小学校の部活動は社会体育活動への移行が進み、2023 年度には大規模な部活動改革案が文部科学省から計画されており、今後、学校体育に依存した形での競技運営は大変難しい時代となっていくことが予想されます。

しかしながら、本協会は生涯にわたって競技を楽しみ、競技から得た価値を社会へ還元していく体制がまだまだ整っていません。役員の高齢化、指導者の人材不足。学校体育に依存した強化体制と組織運営。財源も競技人口の減少に伴い、県からの補助金への依存度が高いのが現状です。1999 年の熊本未来国体以降、取り組み不足があったことはぬぐえません。他県では NPO 法人化をしている協会や地域クラブが存在し、ジュニアからマスターズ世代まで幅広く競技に取り組み、県内大会運営や競技普及、選手強化の中心を担っており、欧米型のスポーツクラブ運営が行われています。

そこで、2022 年に開催が予定されている全国都市緑化フェアを契機に、地元への貢献と連携を深める取り組みをおこない、競技のすばらしさを伝えると共に、地元への貢献ができる人材の育成を念頭においた活動をおこなっていきたいと考えています。また将来的には欧米のような地域クラブ運営にもつなげ、スポーツ交流の拠点としてはもちろん、さまざまな人々が集う環境を整え、環境保全、ジュニア育成、生涯スポーツ振興の一翼を担うような活動につなげていきたいと考えています。

ROWING FOR ALL

全国都市緑化フェアに向けて（2022/3～5）

① テントブースの出展

ボートの展示

映像上映

エルゴブースの開設

VR を使ったボート体験（３６０度カメラで撮影）

② 水上スポーツ体験会

カヌー・サップ・ボート（ナックル艇、エイト）などの試乗会

③ 記念レガッタの開催（2022 年　月　日開催）

市民観戦エリアの設置。

④ レガシーとして

・クラブチームの創設（ジュニアチーム、マスターズチーム）

・協会の NPO 法人化（社会体育活動への対応）

・艇庫建設（ウォータースポーツ交流施設として）

＊湖畔の健康スポーツゾーン構想

熊本市民の健康増進を実践できるエリアとして、広木エリアの江津湖畔と広木公園を「健康スポーツゾーン」と位置づける。下江津湖をボート・カヌーをはじめとするウォータースポーツを楽しめる拠点として、さらには江津湖でのアクティビティーをいかすための施設を整備する。また現存する艇庫は、学校体育施設であり、今後の社会体育移行に備えたスポーツ交流施設としての市民艇庫建設を要望する。

＊憩いの場として、ボート関係者以外でも景観が楽しめる施設にする。また周辺環境、景観に配慮する。

艇庫建設候補地 A･B･C

参考資料１　カワセミローイングクラブ　2017 年創設

水上進む楽しさ味わう

下江津湖を拠点に練習しているキッズボートクラブ「かわせみ」＝熊本市東区

キッズボートクラブ　かわせみ（熊本市）

小学生からボートに親しめる環境を整え、競技人口の裾野も広げようと、２０１７年に県ボート協会顧問の和田建一郎さん(77)が立ち上げた。

熊本市東区の下江津湖が練習拠点。１人乗り用や２人乗り用など８隻と、直線で３００㍍ある練習用コースを設けており、競技や指導の経験がある元教員らがコーチを務める。

月２回の練習日はトレーニングマシンを使ってオールをこぐ基本動作を鍛えたり、ボートで湖面を進み、バランス感覚を養ったりしている。「アメンボのようにスーッと水の上を進む楽しさを味わってほしい」と和田さん。

メンバーは市内を中心に小学２～６年生６人。11月には菊池市である全九州小中学生大会に初参加し、シングルスカルなどの種目で５００㍍のコースに挑む予定だ。

クラブ発足時から在籍する出水小６年、徳田雄輝君は「オールをこいでボートがうまく進むと楽しい。仲間がたくさん増えるとうれしい」と笑顔を見せる。

（松冨浩之）

◇メモ　練習は月２回で原則第２、４日曜日の午前９時～正午。場所は下江津湖の艇庫前（東区広木町）。年会費１万円。入会金は不要。事務局の古内泰治さん☎０９０（５９３１）５３５６。

キラリ！放課後

随時掲載

参考資料２　菊池ジュニアローイングクラブ　　2020 年創設

ボートの街・菊池へ 好発進

7月に発足 小中学生チーム

九州大会で４種目Ｖ

菊池市の斑蛇口湖ボート場（竜門ダム）を拠点に活動する小中学生の「菊池ローイングクラブ」が、1日に同ボート場であった九州大会に出場し、4種目で優勝した。クラブは「菊池をボートの街に」を合言葉に7月に発足したばかり。早々の活躍に、地元が沸いている。

ボート競技の九州大会で４種目で優勝した「菊池ローイングクラブ」のメンバーら＝菊池市

クラブは、県国体チーム強化コーチで市地域おこし協力隊の香月俊彦さん(30)が、競技の裾野を広げようと発足させた。未経験だった小学生15人、中学生5人が練習を重ねてきた。

1日は、初の公式戦となる「第17回全九州小中学生ボート大会」。小学男子と中学男子のダブルスカル（2人乗り）、小学男女のかじ付きクオドルプル（4人乗り）の計4種目を制した。

小中学生の競技人口は少ないが、香月さんは「短期間で力を付けた。メンバーの息が合い、スピードも出ていた」とたたえた。菊之池小6年の赤瀬龍生君は「うまくオールをこげるようになってきた。もっと強くなりたい」と目を輝かせた。

クラブはメンバーを募集中。香月さんは「世界を目指せる選手を育てたい」と話している。

（植木泰士）

小学男子かじ付きクオドルプルで、息を合わせてオールをこぐ菊池ローイングクラブ

目指せ ボートの街・菊池

斑蛇口湖であった体験会でボートをこぐ小学生ら＝菊池市

国内有数コース「斑蛇口湖」

小中学生育成クラブ発足へ

菊池ボート競技の普及に、国内有数の常設コース「斑蛇口湖ボート場」を有する菊池市に7月、小中学生を対象とした「菊池ローイングクラブ」が発足する。「国体選手らが指導。楽しみながら強化を目指し、競技の裾野を広げる」考えだ。

斑ボート場は1989年の熊本国体に合わせ、竜門ダム湖に整備、常設の2キロコースが者り、全国大会や日本代表合宿などに使われてきた。「風なし波なし」と評され、日本ボート協会も「世界に誇れる施設」と絶賛。一方で、地元はいまひとつ盛り上がらず、今は菊池ボート部に引き継がれるのみだ。

そんな中、日体大出身で、県国体チーム強化コーチを務める香月俊彦さん(30)が、市地域おこし協力隊として、ジュニアクラブの設立を提案してきた。

7月の発足に向けて21日に現地で体験会を開き、小中学生15人が参加。香月さんらがこぎ方を優しく教えると、すぐにコツをつかんだ様子で、爽やかな汗を流していた。

菊池北小4年の松永祈佳さんは「スピードが出て楽しかった」とはしゃいでいた。

クラブの加入対象は小学3年・中学3年で、毎週土曜の午後など月6回ほどの練習を計画。香月さんと、日体大の後輩元国体にも出場した飯盛元貴さん(24)＝熊本市＝が指導する。年会費は4300円で、今年の月会費は半円とした。

練習は陸上で基礎体力を付けながら、徐々にボートに慣れてもらう。菊池高生も参加予定で、初心者も楽しめるメニューにしたい」と香月さん。菊池で小中高とボート部を作り、競技の技術を磨き、筑波大へ進学する一長期的な視点で選手育成を図るなど、ボートによる地域づくり構想も地元で浮上している。

香月さんは「菊池は世界を目指せる環境がある。未経験でも大丈夫なので、まずは体験してみて」と呼び掛けている。当面、土日曜日に無料体験会を開催。香月さん☎080（1724）1837。

（植木泰士）

菊池ローイングクラブを作る香月俊彦さん

参考資料 3　2020 年 8 月～10 月

参考資料４　湖畔の健康スポーツゾーン構想

広木公園を含めた下江津湖を湖畔の健康スポーツゾーンとし、ウォータースポーツの拠点として市民艇庫を建設する。

A 艇庫エリア（既存の艇庫ゾーン）

B 広木公園内（湧水広場付近）

C 広木公園内（さえずりの森？ボートコースゴール地点付近）

市民艇庫建設候補地 A・B・C に関して　＊あくまでも個人的な意見です。

A　艇庫エリア（既存の艇庫に隣接）

メリット　…既存の施設（桟橋など）が共有できる。

デメリット…公園利用客も増え、駐車スペースが手狭な状況。閉鎖的なイメージ。
艇庫の建設となるとかなり小規模のものになる。ウォータレタスが溜まりやすい。

B　広木公園内（湧水公園付近）

メリット　…公園内でもあり、開放的で一般市民が利用しやすい。
ボート以外のスポーツとの交流が可能。

デメリット…広木公園のメインスペースを利用するため、理解を得るのが難しいのでは・・・。
人の行き来が多い。艇の運搬などに苦労しそう。増水の際の浸水対策（盛り土等）

C　広木公園内（さえずりの森付近）＊駐車場等も合わせて整備

メリット　…広木公園内でも未開発なところであり、地域の理解を得やすい。目立って良い。
コースが目の前にあり、市民レガッタなどで利用しやすい。

デメリット…桟橋等の整備、増水の際の浸水対策（盛り土等が必要）コストがかかる。

市民艇庫とは

写真は長野県下諏訪町「ＡＱＵＡ（アクア）未来」

【艇庫のイメージとして】

・スポーツ交流施設としての複合型艇庫とする。
・ミーティング室、トレーニング室を備え、多様な活動にも対応できるようにする。
・ボートだけに限らず、カヌー、サップ等のウォータースポーツの拠点とする。
・屋上を設けて、一般市民に開放し、バードウォッチングなど環境教育にも役立つようにする。
・環境に配慮し、自然と調和した外観や構造を備えたものにする。
・広木公園の駐車場の混雑を緩和するよう、十分な駐車スペースを確保する。
・市民レガッタの開催、ジュニア選手の育成、生涯スポーツの振興を活動のメインとできるよう艇の整備を行う。